



「驚き」と「好奇心」を呼び覚ませ！

やまなか ゆりこ
山中 由里子
民博 民族文化研究部

人類は常に、未知なるものに対する好奇心、畏怖、憧憬、知識欲、収集欲に動かされてきた。珍しい不思議なもの・現象を説明し、可視化しようとする欲求は、異なる文化圏において種々さまざまな「異形」として結晶を結び、それは時代とともに移り変わってきた。その類似性あるいは多様性は、我々自身の好奇心を刺激してやまない。

世にも不思議なもの

ギリシアとインドのことで話す太陽の木と月の木、三日間は水が流れ、三日間は砂が流れる河、犬の頭をした人間……。これらはアレクサンドロスが東方の地で遭遇した奇怪な動植物や自然現象である。もちろん史実ではない。紀元三世紀ごろまでにアレクサンドリアで成立したとされるギリシア語の『アレクサンドロス物語』のなかで、マケドニアの征服王が繰り広げる冒険のなかに登場する「東方の驚異」である。この『アレクサンドロス物語』はその後、さまざまな言語に翻訳され、中東、ヨーロッパ各地へと伝播していった。その過程で「東方の驚異」をめぐるエピソードは物語の枠組みを離れ、中世の博物誌、地誌、歴史書、宗教書などに取り入れられ、この世の「周縁」のイメージと深く結びついた。中世ヨーロッパと中東では、不可思議な動植物や自然現象について似たような話が存在するが、それは、この『アレクサンドロス物語』の他にも、一神教的宗教説話群、古代ギリシア・ローマの地理学・科学の遺産などを共有しているからである。

ミラビリアとアジャイイブ

このような辺境・異界・太古の怪異な事物や生き物についての言説は、中世ヨーロッパにおいてはラテン語で *mirabilia* とよ

ばれ、フランス語では *merveilles*、英語では *marvels* となった。一方、中世イスラム世界においては、この世の摩訶不思議を語るこのようなエピソードは、アラビア語・ペルシア語で *ayib* とよばれる。「ミラビリア」も「アジャイイブ」も、いずれも「驚異、驚異的なもの」を意味する語の複数形である。研究者はこのような言説を「驚異譚」とよぶ。

これまでにこの「驚異譚」をめぐる文化圏の相互交流をダイナミックに捉え、中東とヨーロッパにおける驚異譚の、古代・中



いつ、誰が何のために建てたかわからなかった遺跡には驚異譚がつきものであった。イギリスのストーンヘンジは、アーサー王伝説に登場する魔術師マーリンが魔法の力で建てたといえられた

世・近世にかけての大きな展開を俯瞰しようとした総合的な研究はあまりない。そこで立ち上げたのが、民博の共同研究「驚異譚にみる文化交流の諸相——中東・ヨーロッパを中心に」である。

日本人の視点

いし「文化（社会）の無意識」の輪郭をより明確にすることができないのではないかと考える。本研究には西洋古典文学、西洋中世文学、西洋近世史、中世・近世中東史、比較文学といった異分野の専門家がかかわっており、これらが協力して各時代・地域の驚異譚を比較し、伝播の過程、世界観の相違、文化交流のダイナミズムを解明しついでゆこうとしている。

西洋でも、中東でもない東アジア文化圏に属する日本人の我々がこのような研究に取り組み意味は何なのか。ヨーロッパ人の研究者にとときき聞かれる質問である。その意義は、西洋からも中東からも離れた日本に足をおいているからこそ、より複眼的にこの問題に取り組みことができる、というところにある。「文化の三点測量」によって驚異譚の深層に迫ることができるのである。

そもそも、中東とヨーロッパにおける驚異譚と、中国の『山海経』あるいは『日本霊異記』のような「怪異譚」とは、どう違うのか。「驚異」と「怪異」の深層には共通している部分もあるのではないか。またその表象の生成のメカニズムが異なるとしたら、その要因は風土なのか、宗教なのか、言語なのか、それ以外のもの

イギリス、グラストンベリー近郊の「ゴグとマゴグ」とよばれる古木。ゴグとマゴグは「聖書」や「コーラン」にも登場する文明世界の周縁にいる蛮民



最初からこのような大きな問題に挑むつもりではないが、しかし日本人だからこそ浮かんでくるこうした疑問を常に意識しながら東西を眺望すると、「そもそも、人はなぜ驚異／怪異を語りたがり、集めたがるのか」という根源的な問いに、これまでにない角度から光をあてることができるはずである。

近代的な理性性は、驚異譚を「オカルト」、「トンデモ話」と片付けてしまう。また、今や情報は溢れ、通信手段も進歩したにもかかわらず、他者に対する好奇心や想像力が萎えてしまった人間も少なくない。だからこそ本研究は、人間精神の根幹にある（とわたしは信じてやまない）「驚き」と「好奇心」を呼び覚ますようなものでありたい。

民博共同研究
「驚異譚にみる文化交流の諸相」
——中東・ヨーロッパを中心に——
2010年10月～2014年3月
代表者：山中 由里子
*この研究は科学研究費補助金の研究（基盤型）
「中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究」と並行しておこなっている。